

(1)～(3)は、上水道として敷設された竹管の継ぎ手に書かれたものである。(1)の弘化三年（一八四六）は丙午年であり、火災が多いという迷信があるため、この年に上水道を敷設したということも意味があるかもしれない。

(4)は木製の刷毛で、安政五戊午年という年号と宇野という人名が書かれている。嘉永七年（一八五四）の松本城下の絵図より、調査地と考えられる場所に宇野伝右衛門という武士が居住していたことがわかつており、考古資料と絵図が一致した好資料となつた。

(7)(15)は荷札と考えられ、ともに人名が書かれている。享保一三年（一七二八）の絵図によれば、調査地から北へ一軒目に能勢覚兵衛という人物が住んでおり、(7)にみえる人物との関連が予想される。

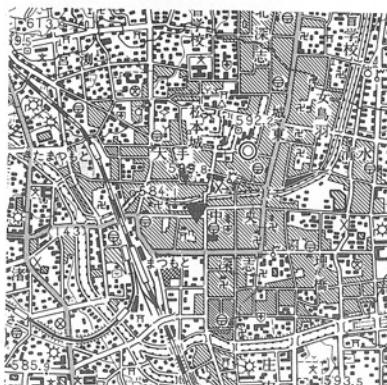
(15)についても、宝永四年（一七〇七）に作成された水野家中録に同人名が載っている。
(13)(16)は曲物の蓋に書かれてあつたもので、(13)は荏胡麻からとった油が入つていたものと考えられる。

9 関係文献

松本市教育委員会『松本城三の丸跡・土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報』（一九九二年）

松本市『松本市史 第二巻 歴史編Ⅱ』（一九九五年）

（竹内靖長）



（松本）

松本市教育委員会『松本城三の丸跡・土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報』（一九九二年）

松本市『松本市史 第二巻 歴史編Ⅱ』（一九九五年）

（竹内靖長）

1 所在地	長野県松本市中央二丁目
2 調査期間	第一次調査 一九九五年（平7）一月～三月
3 発掘機関	松本市教育委員会
4 調査担当者	竹内靖長・村田昇司
5 遺跡の種類	城下町（町屋跡）
6 遺跡の年代	一六世紀～一九世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	松本城は一六世紀末頃に武田氏が信濃侵攻の要所としていた深志城を基礎として、小笠原貞慶や豊臣系大名の石川数正・康長父子により天守閣の築城や城下町の整備がなされた。調査地の伊勢町は、三の丸の外側に位置する「三の町人町」の一つで、安曇平に向かう城下町の西側の要所として位置付けられる。伊勢町は、東西四七五m、南北六三～八四mで、東西に通る街道

長野・松本城下町跡伊勢町

の両側に間口二一・四間で奥行きが長い短冊形の地割がなされている。古文書の記載から、伊勢町には商人や職人が多く居住していたことが推定されている。

今回の調査地は、松本城天守閣の南約八〇〇mに位置する。標高は約五八七mで西側にやや傾斜している。ここでは一六世紀末～一八世紀後半にかけての人為的な整地層が四層発見され、現地表下一七〇cmもの厚さがある。これらの整地層の上面を検出面（生活面）として捉え、遺構を検出している。調査地では、東西に隣接した三軒の屋敷が発見されている。中央の屋敷は隣接する屋敷との境界を東側を溝で、西側を杭列（板塀や垣根のようなものと考えられる）によつて区画されている。各屋敷の敷地内の遺構分布をみると、街道に面した表側の部分には建物跡が集中し、屋敷裏側には屋敷に隠れるような形でゴミ穴（廃棄土坑）が掘られている点が共通している。木簡は、第一検出面（一八世紀後半）の敷地内の最も奥に位置する土坑一〇一から一五点出土した。伴出遺物は、陶磁器類・木製品（曲物、下駄、荷札木簡）・軒丸瓦（立沢鴻紋瓦：松本城主の水野氏の家紋瓦）などがみられる。陶磁器は、肥前系の染付椀（くらわんか椀）・皿、瀬戸美濃系の拳骨椀・灰釉椀・掛けわけ皿・仏花瓶・仏飯具などがみられ、一八世紀後半に比定されるものが多いようである。

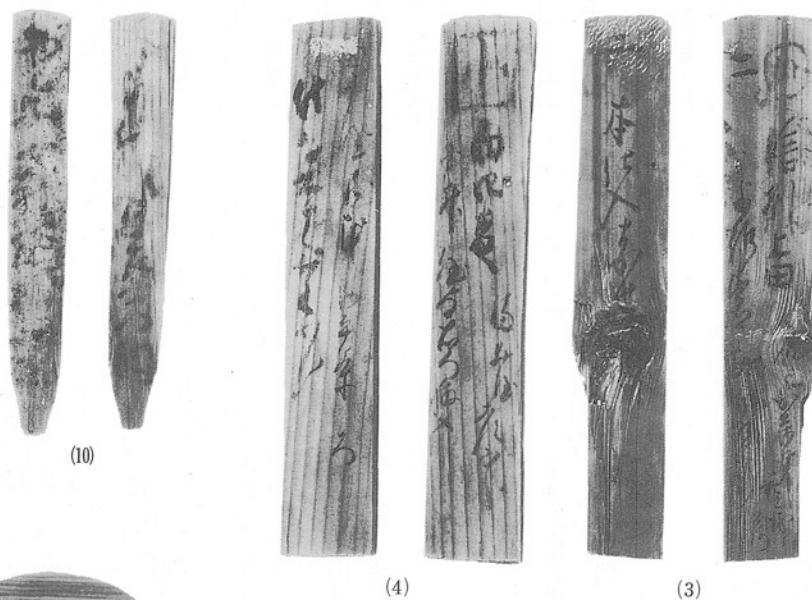
- | | | |
|-----|---|-------------------|
| (1) | ・「小諸本町
布屋定吉様
イ一式百十八」 | 御国屋
吉兵衛 |
| | 余
内朱粉無地弁当式束
□□□□□式束 | 」
250×62×7 011 |
| (2) | ・「
イ一式百十
御□□
吉兵衛」 | メ八束 |
| | 余
内朱粉四□七束
□□□式束 | |
| (3) | ・「□
二 よ路寿や 勘助殿行
信州上田 飯山加茂屋利兵衛
荷」 | 242×58×7 019 |
| | 余
内朱粉四□七束
□□□式束 | |
| (4) | ・「
小 百四番 福井屋彦五郎
小升屋与右衛門入」 | 」 243×42×6 019 |
| | 代百六十五匁五分 | 241×41×10 011 |
| (5) | ・「四ツ屋 本□平茶 ろ
淡路守 荷物」 | |



(5)

(2)

(1)



(10)

(3)

(4)

(11)

松本城下町跡伊勢町出土木簡

$S=1/3$

- | | | |
|------|------------|-------------------|
| (1) | 「允□□」 | 222×43×8 015 |
| (2) | 「□□」 | 230)×54×9 011 |
| (3) | 「允□□」 | 222×43×8 015 |
| (4) | 「□□」 | 232×(25)×8 011 |
| (5) | 「□□」 | 205×60×8 011 |
| (6) | 「□□」 | 204×27×9 015 |
| (7) | 「允□□」 | (188)×(15)×10 015 |
| (8) | 「□□」 | |
| (9) | 「□□」 | |
| (10) | 「手代 忠左衛門納」 | |
| (11) | 「□□与薪」 | 170×27×9 051 |
| (12) | 「允 小郷屋□□」 | 275×65×13 011 |
| (13) | 「□□」 | 330×92×7 061 |
- （11）と（13）以外は、すべて荷札木簡とみられる。（1）（2）は、御国屋吉兵衛という人物が差し出した荷の荷札と考えられる。（1）は小諸本町（長野県小諸市）の布屋定吉という人物に送ろうとした荷の荷札であるが、何等かの理由で送られずに廃棄されたものと考えられる。またそれぞれの荷札にみられる「イ一弐百十八」や「イ一弐百十」は、取引上の証書番号のようなものと推定される。（3）は、上田（長野県上田市）の加茂屋利兵衛がよ路寿や勘助に送った荷の荷札と考えられる。（11）は、曲物の蓋に「淨信寺」と寺院の名が記されている。（13）は羽子板に墨書きがみられる。（8）（9）（13）～（15）は、文字が判然としない。
- 9 関係文献**
- ・松本市教育委員会『松本城下町跡伊勢町～近世・町屋跡の発掘調査～』（一九九六年）
 - ・松本市『松本市史 第一巻 歴史編Ⅱ』（一九九五年）
- （竹内靖長）